



「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクト事業 令和4年度 高知の授業づくり講座」では、学習指導要領が目指す授業づくりを押し進めるとともに、日常的に授業研究に取り組む風土づくりを行い、自ら学び続け、共に高め合う教員の育成を目指し、拠点校を会場に教材研究会・授業研究会を1セットとして、年間2セット実施します。高知市の中学校国語の拠点校である春野中学校の第3回【教材研究会】(10月18日実施)、第4回【授業研究会】(11月17日実施)を中心に本単元の学びの様子を紹介します。

単元名：「# (ハッシュタグ) 春中発信！六年生のあなたにこそ読んでほしいこの名著 ～根拠を明確にして自分の考えを書く～」【出典】『助言を自分の文章に生かそう 作品の書評を書く』(光村図書『国語1』)

第3回 教材研究会

指導における課題を解決するための単元づくり

<これまでの授業における生徒の状況>
 ・書くことへの抵抗感が高いが、自分の考えを思いのままに書いている。
 ・相手や目的を意識して、根拠や例を挙げながら考えが伝わるように書くことに課題がある。

↓

「指導における課題」
 ・単元を通して「毎時間文章を磨き上げていく指導ができていない。
 ・根拠(事実・情報・データ・具体例)と自分の意見のつながりに着目せず、伝えたいことが伝わる文章になっているか考えさせる指導ができていない。
 ・相手や目的に合った文章が書けているか吟味する指導ができていない。

↓

相手や目的を意識して、自分の考えが伝わるように根拠を明確にして文章を書く力を付ける！

<本提案の指導上のポイント>
 ・毎時間、修正し積み重ねてきた過程を可視化することで、単元を通して文章を磨き上げていくことができるようにする。→Googleスライドの活用
 ・選んだ本を要點別に評価し分析させることで、伝えたいことを明確にさせる。
 ・読み手に伝えたいことを伝えるために、必要となる根拠(叙述・推察などの具体例)が何かを考えさせる。→思考の構造化

第4回 授業研究会

言語活動を通して資質・能力の育成を図る単元構想

時	学習活動
1	学習の見通しをもつ。 小学6年生にすてまい本を選び、書評を書く。
2	本の価値が伝わる書評には、どのような工夫があるのかを考え、自分の文章を見直す。
3	本の価値を伝える表現が読み手を引き付けるものになるように、より価値が伝わる表現の工夫を考え、文章を見直す。
4	書評を2年生に読んでもらい、自分の書評のよい点や改善点を整理し、文章を見直す。

【単元の目標】
 【学びに向かう力、人間性等】
 書かすもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にしたり、思いや考えを伝え合おうとする。

【知識及び技能】
 読書が、知識や情報を得たり、自分の考えを膨らませたりすることに役立つことを理解することができる。(31ア)

【思考力、判断力、表現力等】
 根拠を明確にししながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。(B11ウ)
 根拠の明確さなどについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすことができる。(B11オ)

【単元計画】
 【本時の目標】
 根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができる。

「言語活動」の創意工夫

生徒の主体的な学びのエンジンとなる魅力的な言語活動、単元における課題解決的な活動を仕組む。

本提案では、小学校からの依頼を受け、小学6年生(相手)の読書の幅を広げ、本の価値を伝えるため(目的・意図)に書評を書くという、明確な他者意識、学ぶ必然性をもたせた。

【第1時(前時)】 I 「読書」の指導事項を捉えた指導の工夫

・小学6年生に行った読書アンケートを基に読書傾向を捉え、上、「読書記録シート」から本を選ぶことで、「どの本を」「なぜ相手に薦めたいのか」を明確にさせる。

・選んだ本を見せながら伝えたいことを説明したり、知りたことや分らないことを質問し合ったりすることで、互いの「本の内容の理解」「書きたいことの吟味」につなげる。

共有したことや分析シートを活用し、書評を書く。

共有を踏まえ、選んだ本の分析を指導せよ。

読書記録シートから薦めた本を選び、読書記録シートから薦めた本を選び、分析シート

授業づくり講座講師 富山哲也先生による本単元への助言

「書くこと」の資質・能力の育成に向けた指導と評価

①「書くこと」の学習過程のメタ認知
 →自力で文章を書く力をつけるために、「書くこと」の学習過程を生徒自身が自覚して書き進められるように見通しをもたせる。

②モデル文の効果的な提示
 →必ず提示するのではなく、資質・能力の確実な育成につながるようタイミングや内容(生徒の表現の多様性につながるもの)を考える。

③文種としての「書評文化」の理解
 →実生活の中の「書評」の示され方、多様性を押さえた上で、目的・相手や内容を踏まえた形式・表現を選択させる。

④「書くこと」の既習事項と系統性を捉えた指導の工夫
 →これまでの読書活動に係る言語活動(目的・相手)、「書くこと」における「記述」の系統性を踏まえた指導の工夫を行う。

⑤知識及び技能「読書」の指導事項を捉えた指導の工夫
 →第1時において、自分が伝えたい本の「書評」を説明し、質問を受けさせることで、互いに選んだ本の内容の理解、書きたいことの吟味につなげる。

⑥「書くこと」における「根拠」の重視
 →学力調査からも、子供たちは自分の考えを詳しく述べる等、根拠がない実態があり、「書くこと」では根拠が何度も吟味させる指導が必要である。

※本の価値について、引用等を使って説明と根拠

⑦効果的なICTの位置付け
 →今までに行っていた学習の流れに、生徒の思考を高めるようICTを位置付ける。(例：書評のリアルページにアクセスできるようにデータベースに入れ、ロイノートで思考を可視化する等)

「本時における適切な評価」

【評価規準・評価方法】

「書くこと」において、根拠を明確にしながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫している。(B11ウ)

【第1時の生徒の書評】

「読者の素者」の魅力は、壮大なストーリーを彩る表現の工夫にある。

幼い頃、母と死に分かれたエリンは、蜂飼いに拾われ、そこで王様と出会う。一人の少女の願いがやがて国まで巻き込んでいくところが、物語の壮大さを感じている。「さつと針で刺されたような痛みが胸の底に走り、そこから、熱い涙が広がった。」のように心の痛みを上手く表現し、感情移入しやすくなっている。

【第2時後の生徒の書評】

「読者の素者」の魅力は、壮大なストーリーを彩る表現の工夫にある。

幼い頃、母と死に分かれたエリンは、蜂飼いに拾われ、そこで王様と出会う。その出会いが、後のエリンと人々の運命を大きく変えていくことになる。一人の少女の願いがやがて国まで巻き込んでいくところが、物語を背にした山の輪郭(くまじょう)だったが、朝日や雲に染み出した山(くまじょう)は、淡く(あわ)い顔色に浮かび上がっている。」などは、思わぬ顔色の中に美しい情景が浮かんでくる。

絵のない小説に迫力を感じるには、比較(ひかく)や正確な表現を使って、読者に想像をもちょうかがない。ただ、文章の情景を必死に想像し、表裏を絡めながら描く。本の世界から隔ててきたような不思議な感覚になることがある。賢さんも、長編小説に根拠して、その感覚を味わってほしい。

Ⅲ 「根拠」の効果についての理解を促す指導と適切な評価

【本時における指導の工夫】

○文章の改善点の明確化
 書評モデルの構成(板書)を生徒に考えさせ、本の価値を伝えるためには、単によさを述べるのではなく、価値の根拠となる本の叙述を取り上げたり、引用したりすることで、読み手ばかりややすく伝えることを実感させる。

また、前時に整理した「分析シート」に戻り、価値を伝えるためには、どの叙述(根拠)を取り上げると効果的か、伝えたいこととのつながりを踏まえ、読み手を意識した根拠を吟味、検討させる指導を行う。

★Googleスライドを活用し、毎時間書いたスライドシートを蓄積していくことで、改善の過程が明確になる。また、改善した意図、その効果について意見を共有したことを基に、書評を再検討させる指導が効果的である。

★不十分なモデルを提示して、改善点を気付かせる等の指導の工夫も考えられる。

【本時の評価について】
 上の生徒は、本の魅力や「表現の工夫」として捉え、それを読み手に伝えるために、適した根拠を検討し、赤線部分を見通すことができていたため、「おおむね満足できる状況」(B)と判断した。
 さらに、青線部分を付け足し、相手意識の高まりも見られたため、「十分満足できる状況」(A)とした。

Ⅱ 既習事項と系統性を捉えた指導の工夫

【書くこと「考」の形成、意図】

目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、書きたい点や区別したい点に書いたりすると、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
 エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
 根拠を明確にししながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。
 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるよう工夫すること。
 表現の仕方や考え方に資質を適切に引用したりするなど、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること。

【本時の評価について】
 「具体的な改善点(書くためのポイント)」として見付けさせる。
 考えと根拠のつながりに着目した上で、よさや効果を整理するために、どのような工夫をするのかを視点に置き、授業づくりを進めていきたいです。

教材研究会を踏まえた提案整理

I 「読書」の指導事項を捉えた指導の工夫
 II 既習事項と系統性を捉えた指導の工夫
 III 「根拠」の効果についての理解を促す指導と適切な評価

「書くこと」の資質・能力の育成に向けた指導と評価

①「書くこと」の学習過程のメタ認知
 →自力で文章を書く力をつけるために、「書くこと」の学習過程を生徒自身が自覚して書き進められるように見通しをもたせる。

②モデル文の効果的な提示
 →必ず提示するのではなく、資質・能力の確実な育成につながるようタイミングや内容(生徒の表現の多様性につながるもの)を考える。

③文種としての「書評文化」の理解
 →実生活の中の「書評」の示され方、多様性を押さえた上で、目的・相手や内容を踏まえた形式・表現を選択させる。

④「書くこと」の既習事項と系統性を捉えた指導の工夫
 →これまでの読書活動に係る言語活動(目的・相手)、「書くこと」における「記述」の系統性を踏まえた指導の工夫を行う。

⑤知識及び技能「読書」の指導事項を捉えた指導の工夫
 →第1時において、自分が伝えたい本の「書評」を説明し、質問を受けさせることで、互いに選んだ本の内容の理解、書きたいことの吟味につなげる。

⑥「書くこと」における「根拠」の重視
 →学力調査からも、子供たちは自分の考えを詳しく述べる等、根拠がない実態があり、「書くこと」では根拠が何度も吟味させる指導が必要である。

Ⅲ 「根拠」の効果についての理解を促す指導と適切な評価

【本時における指導の工夫】

○文章の改善点の明確化
 書評モデルの構成(板書)を生徒に考えさせ、本の価値を伝えるためには、単によさを述べるのではなく、価値の根拠となる本の叙述を取り上げたり、引用したりすることで、読み手ばかりややすく伝えることを実感させる。

また、前時に整理した「分析シート」に戻り、価値を伝えるためには、どの叙述(根拠)を取り上げると効果的か、伝えたいこととのつながりを踏まえ、読み手を意識した根拠を吟味、検討させる指導を行う。

★Googleスライドを活用し、毎時間書いたスライドシートを蓄積していくことで、改善の過程が明確になる。また、改善した意図、その効果について意見を共有したことを基に、書評を再検討させる指導が効果的である。

★不十分なモデルを提示して、改善点を気付かせる等の指導の工夫も考えられる。

Ⅱ 既習事項と系統性を捉えた指導の工夫

【書くこと「考」の形成、意図】

目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、書きたい点や区別したい点に書いたりすると、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
 エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。
 根拠を明確にししながら、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。
 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるよう工夫すること。
 表現の仕方や考え方に資質を適切に引用したりするなど、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること。

【本時の評価について】
 「具体的な改善点(書くためのポイント)」として見付けさせる。
 考えと根拠のつながりに着目した上で、よさや効果を整理するために、どのような工夫をするのかを視点に置き、授業づくりを進めていきたいです。